（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	林 孝洋
論文題目	大西洋を超えるイタリア系移民／亡命者の実践 ―アメリカ合衆国におけるイタリア統一支援運動―		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、イタリア統一もしくは失われた領土の回復を目指す政治的運動という側面を持つリソルジメントに関連して、アメリカ合衆国に住むイタリア系移民／亡命者の主体的な行動、すなわちイタリア統一支援運動をとりあげ、トランスナショナル・ヒストリーの手法を用いることによって、新たな歴史像を提起することを目指したものである。当該時期にナショナル・アイコンとなったジュゼッペ・ガリバルディのイメージや語りは、祖国から離れた土地に住むイタリア系移民／亡命者に祖国とのつながりを意識させ、イタリア系住民を団結させた。その結果、彼らによって遠隔地で祖国に対する支援が展開されたのである。

このリソルジメント支援についての先行研究では、運動における「旧体制」の打倒という思想的な共感に注目がなされてきたが、これに対し本論文は、イタリア系移民／亡命者の主体性から、北部自由州諸都市以外の地域も含めたアメリカ合衆国でのリソルジメント支援運動の考察を試み、19世紀中葉のニューヨーク、サンフランシスコ、ニューオーリンズの３都市におけるリソルジメント支援、ガリバルディ支援を担ったイタリア系移民／亡命者の活動を研究対象としている。

第一章では、ニューヨークに渡った亡命者を思想と現実の媒介者として捉え、彼らの実施した寄付募集活動を分析する。亡命者アヴェッツァーナは、ガリバルディの遠征に対する支援の素地をニューヨークに見たのであった。そしてガリバルディに対する寄付募集活動が、アヴェッツァーナが代表を務める「イタリア協会」の日常的実践、奴隷制をめぐる自由州の議論とガリバルディの遠征を関連付ける日々の報道、そしてガリバルディ自身が持つ英雄としての文化的イメージの混淆によってニューヨーク市民、イタリア系住民、他民族の亡命者をも巻き込んだ動きへと昇華していったことを示した。

第二章では、先行研究の地理的な制約を越えて、西部主要都市のサンフランシスコへと目を向ける。政治亡命者の「神話的側面」を解体しながら、ゴールドラッシュを契機に、それまで居住していた南アメリカ大陸から流入してきたイタリア系商人とサルデーニャ王国から死刑判決を受けてサンフランシスコに流れ着いた亡命者が構築した空間に注目する。亡命者や思想家に対象を限定してきた先行研究に対し、遠隔地でのリソルジメントを担った新たな主体として商人の活動を分析することで、サンフランシスコのイタリア統一支援運動が、亡命者と移民が織りなす空間で実践されたことを提示した。

第三章では、これまでの北部中心的な語りを相対化するために、合衆国奴隷州の主要都市ニューオーリンズで実践されたガリバルディ支援運動を、それを担った人々のライフストーリーから分析した。イタリア半島、南米大陸、そしてニューオーリンズを商業圏として生活していたイタリア系商人が、本国に対する支援運動を展開したことを示したうえで、申請者は彼らのアイデンティティの二重性に注目し、彼らはイタリア系移民として本国イタリアの統一運動を支援しながら、ニューオーリンズの市民としては、自身の経済利益を維持するため、明確に南部の自由主義に共感していた、と論じた。

以上の考察から、申請者は最終章で、リソルジメントを現在のイタリア共和国の範囲内で完結する歴史として認識するのではなく、アメリカ合衆国をリソルジメントの「最も遠い銃後」として評価することを主張し、この「銃後」での動きは、イタリア系移民／亡命者の生活様式や商業形態、そして都市の経済的・社会的背景に左右され、それぞれの都市空間ごとに異なるあらわれ方をしたことを指摘した。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文は、ナポレオンによるイタリア制圧以後、度重なる戦争等の被害からアメリカ合衆国に逃れた多くの移民／亡命者が、出身地と商業的・政治的・社会的な相互関係を維持しながら、祖国を支援しようとしたリソルジメント支援運動について、新たな視座（新規性）と確かな論証（実証性）にもとづき歴史像を再構築しようとしたものである。このうち新規性にかかわる論点については、以下の諸点を評価できる。

第一に、今日のリソルジメント研究は、従来の一国史研究の根底にある「方法論的ナショナリズム」を乗り越えようとする過渡期にある。したがってイタリア統一運動の範囲を現在の国民国家の枠組みで解釈するのではなく、行為主体をイタリア半島外に居住しているイタリア半島出身者にまで拡大し、イタリア系移民／亡命者と移動先の市民や社会とのかかわりに注目しながら、トランスナショナルなイタリア統一運動を描く本論文の記述は、イタリアの国家統一運動をイタリア国内に限定的な歴史とする認識に修正を迫るものであると評価できる。

第二に、アメリカ合衆国におけるガリバルディ支援の先行研究は、合衆国北部で展開したガリバルディ支援のみを、しかも思想史の文脈から分析することで、自由主義の流れの中で反奴隷制運動とガリバルディ支援が結び付いたことを強調し、北部の支援構造を合衆国全体のものとして一般化していた。これに対し本論文は、北部中心の解釈を乗り越えるため、西部・南部のケースをも分析の視野に入れ、合衆国北部でのガリバルディ支援が、あくまでも支援の一つの形に過ぎないことを示した。

第三に、本論文が合衆国のガリバルディ支援の議論を思想の交流のみに収斂させていない点があげられる。本論文は、イタリア系亡命者／移民の主体性に注目しながら、彼らが展開した本国への寄付募集活動を分析することで、前線から離れた場所にいる人々が、生活を営み、その利益でもって本国を支援する「銃後」を移動先で形成していたことを明らかにした。この論点はあらたな事実の発見である。

最後に、本論文の実証面における優位性を指摘しておきたい。学位申請者は、イタリアのマントヴァやナポリなどの文書館において、未刊行の一次史料、すなわち書簡・会計史料等を現地調査し、手稿類の採録と分析を積み重ねてきた。また、国立ニューオーリンズ公共図書館所蔵のLe Courrier de la Louisiane紙の調査を行うなど、これまで活用されてこなかった刊行史料にも目配りを怠らず、研究に取り入れた。このような調査・採録・分析を支えていたのは申請者の高いコミュニケーション能力と語学力である。

とはいえ、課題がないわけではない。イタリア国内の募金と合衆国でのそれとの関係や集められた資金の使われ方、３都市の土地柄に関する考察、運動における女性の役割、移民の帰属意識などについては、細部における考察が欠けていたり、実証の分量が足りないとは言える。しかしながら、これらについては、今後の研究の進展によって解決可能な課題であると判断できる。論文の新規性と実証性に加え、全体の論旨が一貫していることも高く評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和３年１月２９日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降